

がんゲノム医療における看護師の役割

The Role of Nurses in Cancer Genomic Medicine

三 富 亜 希

Aki MITOMI

要 旨

がんゲノム医療の拡大に伴い、がん遺伝子パネル検査やコンパニオン検査が日常診療で広く用いられるようになった。これにより、検査結果が治療選択や将来の健康管理に影響を及ぼす場面が増え、看護師には検査前後の支援に加え、患者と家族の価値観に寄り添った意思決定支援、倫理的配慮、多職種との協働が求められている。当院では、がんゲノム医療コーディネーター、遺伝担当看護師、遺伝看護専門看護師が連携し、継続的な支援体制を整備している。また、院内学習会や地域の医療者向け講演会を通じ、看護師のゲノムリテラシー向上と地域医療体制の強化に取り組んでいる。今後も看護師の専門性を高め、患者が自身の価値観に基づき納得して治療を選択できるよう、意思決定支援を充実させることが重要である。

1. はじめに

近年、次世代シーケンサー (Next Generation Sequencing: NGS) の進歩により、がん遺伝子パネル検査 (Comprehensive Genomic Profiling: CGP検査) が臨床現場に急速に導入されている。2019年に保険収載されて以降、がんゲノム医療は「個別化医療」の実現に向けて発展し、患者一人ひとりの遺伝情報に基づいた治療方針の検討が日常診療の一部となっている。一方で、検査の結果に治療標的が得られない場合や、偶発的に遺伝性腫瘍の可能性が明らかとなる「二次的所見 (secondary findings)」が含まれることもあり、患者や家族に新たな心理的・社会的課題をもたらしている。このような複雑化する医療環境の中で、患者を中心とした包括的な支援体制を構築することが不可欠である。多職種のなかでも看護師は患者と家族に最も近い立場に関わる存在であり、医学的知識に加え、倫理的配慮や治療・生活両面における意思決定支援が求められている。

1. がんゲノム看護外来および遺伝看護外来の開設

2020年に遺伝子パネル検査 (CGP検査) 検査が開始され、がんゲノム医療コーディネーター (Cancer Genome Medical Coordinator: CGMC) は、検査提出

時の診療に同席し、検査に関する説明や同意取得、二次的所見の説明などを行ってきた。しかし、CGP検査件数の増加に伴い、一人ひとりの患者に十分な時間をかけて関わるのが難しい状況が続いていた。そこで当院では、2023年よりCGP検査を受ける患者を包括的に支援することを目的に、「がんゲノム看護外来」を開設した。この外来では、CGP検査を受ける患者に対して、検査の目的や流れ、遺伝情報に基づく治療選択、二次的所見の可能性などについて丁寧に説明し、患者の理解を深める支援を行っている。また、検査や結果に対する不安や疑問に寄り添いながら、心理的支援や意思決定支援を行うことも重要な役割としている。がんゲノム看護外来の開設により、CGP検査に関わる看護の介入機会が拡大し、患者一人ひとりの状況に応じたきめ細やかな支援が可能となった。今後は、外来での支援内容や患者の反応を振り返りながら、がんゲノム医療における看護の役割をさらに明確にし、より質の高い支援体制の構築を目指していきたいと考えている。一方で、2022年に遺伝性乳がん卵巣がん症候群 (Hereditary Breast and Ovarian Cancer syndrome: HBOC) に対する診療が保険適用となったことを受け、遺伝学的検査やサーベイランス (検診)、予防的リスク低減手術を検討する患者が増加した。それに伴い、遺伝に関する相談も急増し、当院では2021

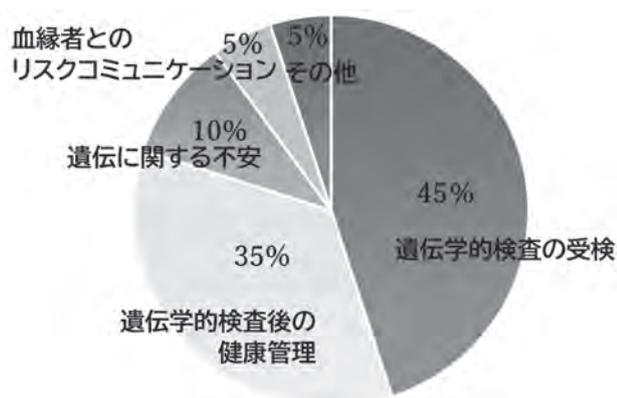


図1 遺伝看護相談の内訳（2023年～2024年）

年よりがん看護外来において遺伝看護外来を開始した。当院の過去2年間における遺伝相談の内訳を示す（図1）。

遺伝看護相談で最も多かったのは遺伝学的検査受検に関する相談であり、全体の45%を占めた。内容は遺伝学的検査の適応や検査を受ける意義、検査結果が治療選択に及ぼす影響などに関する質問が多く認められた。次いで多かったのは、遺伝学的検査後の健康管理に関する相談であり、全体の35%であった。内容は検査結果を踏まえたサーベイランス（検診）や予防的介入の選択、長期的な健康管理への不安に関連する内容であった。

また、遺伝に対する心理的な不安に関する相談が10%を占め、検査結果を受け止める際の感情面の揺らぎや、将来に対する漠然とした不安などが挙げられた。血縁者へのリスクコミュニケーションに関する相談は5%であり、家族への情報共有方法や伝えるタイミングについての支援が求められた。

遺伝看護相談では、検査選択に関する意思決定支援と検査後の生活支援が主な内容であり、加えて心理的サポートや家族への情報共有支援も重要である。さらに、遺伝学的検査の結果が将来の治療方針や生活設計に影響を及ぼすことを踏まえ、患者の価値観やこれからの生活を尊重したアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の視点から、患者・家族が将来の医療・健康管理を主体的に考えられるよう支援することが求められている。

2. がんゲノム医療に携わる看護師の役割

がんゲノム医療の実践には、看護師が多様な立場で関わっている。当院では、がんゲノム医療コーディネーター（Cancer Genome Medical Coordinator：CGMC）、遺伝担当看護師、および遺伝看護専門看護師（Genetic Clinical Nurse Specialist：GCNS）が、それぞれの専門性を生かし、患者・家族の支援を行っている。以下に、それぞれの役割と実際の関わりについて紹介する。

(1) がんゲノム医療コーディネーターの役割

がんゲノム医療コーディネーター（Cancer Genome Medical Coordinator：CGMC）は、がんゲノム医療が円滑に実施されるよう調整を担う役割をもつ。当院のCGMCは看護師6名と臨床検査技師1名で構成され、検査前の説明から検査結果説明時まで一貫した支援を行っている。CGMCは、検査が安全かつ適切に実施されるよう支援し、患者中心のケアを継続的に提供する役割を担う。

検査前には、患者の治療歴・家族歴・生活背景・価値観などをアセスメントし、検査受検に伴う潜在的課題を抽出する。また、CGP検査の目的、治療への期待、二次的所見の取り扱い、費用・保険制度などをわかりやすく説明し、患者が納得したうえで検査の受検を意思決定できるよう支援する。検査後は、結果が治療方針に及ぼす影響や、専門診療科受診の流れを明確にし、不安の軽減につなげている。また、面談では、がん医療特有の不安や治療への期待を丁寧に確認し、専門用語が多い説明内容を患者の理解度に合わせて補足している。必要に応じて家族同席を促し、視覚資料を用いながら、情報の整理と意思の明確化を支援する。

さらに、必要時には主治医や外来スタッフ、緩和ケアチームなどと連携し、多職種で患者の価値観を共有することで、検査前後の支援が途切れない体制を整えている。特に、治療選択肢が得られない場合や治療開始までの待機期間が長期化する場面では、期待と不安が共存しやすく、緩和ケアの視点を含めた支援が重要となる。患者や家族が抱く将来への不安や治療喪失感に寄り添い、ACPを視野に入れた支援を展開することが求められている。また、検査結果により二次的所見の可能性が示唆された場合には、遺伝カウンセリング外来へとつなぐ役割も担っている。

(2) 遺伝担当看護師の役割

遺伝担当看護師は、がん医療と遺伝医療をつなぐ橋渡し役として、2020年より活動を開始した。現在は外来および病棟の看護師7名が担当し、遺伝カウンセリング業務を中心に、遺伝的背景をもつ患者および家族への支援を行っている。主な業務は、プレカウンセリング、家族歴の聴取、遺伝カウンセリング後のフォローアップなどである（図2）。検査前には、患者が検査を希望する理由や受検への不安、家族への影響などを確認し、遺伝看護相談につなぐ役割を担う。外来や病棟では、診療の合間に寄せられる遺伝に関する相談に対応し、受診調整や資料提供、必要に応じて家族面談へつなぐことで、患者・家族の不安軽減と理解の促進を図っている。また、意思決定の背景にある価値観や家族関係に着目し、患者が自身の状況を整理しやすいよう、対話を通じ

- ① プレカウンセリングの実施
- ② 遺伝カウンセリングへの陪席と面談
- ③ 遺伝看護相談への対応
- ④ 多職種カンファレンス・がんゲノムワーキンググループへの参加 (毎月定期開催)
- ⑤ 所属部署における学習会の開催

図2 遺伝担当看護師の業務内容

て支援している。検査結果開示後は、心理的反応に注意深く関わり、動揺や戸惑いがある場合には遺伝カウンセリング外来の再受診や遺伝看護相談を提案するなど、状況に応じたフォロー体制を行っている。さらに遺伝多職種カンファレンスに参加し、看護の視点からの支援方針の検討に寄与している。自部署での学習会を開催し、看護職のゲノムリテラシー向上にも取り組んでいる。一方で、遺伝担当看護師は通常業務と並行して活動しており、継続的な実践経験を積むことや、専門的知識の維持・習得が容易ではないという課題がある。外来・病棟業務の状況により関与の頻度が変動しやすく、症例経験が偏ることもある。遺伝学は日々進歩しているため、最新情報の収集や教育機会の確保が求められる。安定した支援体制を維持するためには、リソースの確保や院内教育体系の強化が必要である。

(3) 遺伝看護専門看護師の役割

遺伝看護専門看護師 (Genetic Clinical Nurse Specialist : GCNS) は、2020年に日本看護協会が認定した専門看護師資格であり、遺伝に関する高度な専門知識と倫理的実践力をもって、遺伝的要因に関連する健康課題を抱える患者および家族を包括的に支援する役割を担う。がんゲノム医療の進展に伴い、CGP検査を契機に遺伝性腫瘍の可能性が明らかになる症例が増加しており、GCNSは検査前後の意思決定支援や心理的ケアを行っている。

検査前には、患者が検査を受ける動機や価値観、家族歴、生活背景を丁寧に把握し、遺伝情報をもたらす影響と意思決定の方向性を共に整理する。検査説明の際には、専門用語の補足や感情の揺れへの対応を行い、患者が自身の言葉で「何のために検査を受けるのか」を語れるよう支援している。検査結果開示後には、期待と不安が錯綜しやすいタイミングに寄り添い、必要に応じて家族面談や多職種カンファレンスを調整し、継続的な支援につなげている。また、二次的所見を含む遺伝情報については、患者・家族への説明や対応方針の調整を担い、臨床遺伝専門医や遺伝チームなどと協働しながら、倫理的葛藤に配慮した支援を実践している。とくに、結果が治療方針に直結しない場合にも、患者が検査の意義を肯定的に受け止め、自らの将来や家族の健康管理を

見据えられるように支援することが求められている。

教育の視点からは、院内外の看護職を対象とした学習会や研修会において、ゲノム医療における看護実践と倫理的視点の普及に努めている。特に、遺伝医療については、臨床現場で体系的に学ぶ機会が限られることから、GCNSが教育的役割を担い、看護職の理解促進と支援能力の向上に寄与することが重要である。そして、遺伝担当看護師や多職種と協働し、看護部内の相談体制の整備や人材育成にも関与することで、組織的な支援体制の構築を推進する役割を担うことが求められる。一方で、がん医療における遺伝医療の普及には、診療体制や人材育成、倫理的配慮など多方面にわたる課題が存在する。遺伝医療に関する知識を習得するには、臨床現場の忙しい診療体制の中で学習機会を確保することが容易ではなく、遺伝看護の実践は症例数に左右されやすく、経験の蓄積や継続的なスキル維持が課題となる。さらに、院内での認知度向上や多職種間の役割理解、相談体制の整備には時間と継続的な働きかけが必要である。今後も引き続き教育体制の強化や人材育成、組織内の連携促進を通して、遺伝看護の普及と質向上を継続していくことがGCNSの役割として重要と考える。

3. 遺伝がん看護の実践とがんゲノム医療を受ける患者への支援

がんゲノム医療におけるCGP検査は、患者の遺伝情報を包括的に解析し、治療選択の可能性を広げる検査である。しかし、すべての患者で治療の選択肢が得られるわけではなく、「治療に直結する結果が得られなかった」と感じる患者も少なくない。一方で、たとえ治療に結びつく結果が得られなかった場合でも、CGP検査を受ける過程そのものが、患者にとって自身の病状を改めて理解し、これからの人生と向き合う貴重な機会となっている。また、治療の選択肢が限られている場合であっても、検査結果を踏まえながら「これからどのように生きていきたいか」「どのような医療を望むか」を医療者と共に考えることが、ACPIにつながる重要なプロセスとなっている。そのため、がんゲノム医療を受ける患者への看護支援は、検査説明や結果理解を助けることにとどまらず、患者の人生観・価値観を共有し、希望を尊重した意思決定を支える役割がある。また、検査の過程で生じる「治療がないかもしれない」という現実への不安や喪失感に対し、感情の共有や寄り添いを通して、患者が前向きに日常を再構築できるよう支援している。このような関わりを重ねるなかで、患者自身が自分らしい生き方を見つめ直し、その意味を新たに見いだせるよう支えることが、がんゲノム医療における看護の役割である。

4. がんゲノム医療推進に向けた院内教育と地域に向けた取り組み

がんゲノム医療センターでは、がんゲノム医療に関する教育の一環として学習の機会を提供している。内容として、がんゲノム医療や遺伝性腫瘍関連の学習会や講演会を定期的で開催し、職員全体が最新の知識や倫理的課題を学ぶ機会を設けている。院内学習会では、がん遺伝子パネル検査の基本的な知識や実際について、また遺伝性腫瘍（HBOC、リンチ症候群など）の基礎を取り上げ、学習会を通じて、臨床で活用できる知識と支援方法を習得する機会を提供している。昨年度、院内外に向けた学習会では臨床遺伝専門医や認定遺伝カウンセラー、GCNSが講師として参加し、実際の症例を通して検査結果の読み解きや患者支援の実際を学ぶ学習会を開催している。これにより、院内スタッフは遺伝医療に関する理解を深めるだけでなく、患者の心理的側面に配慮した支援方法を学ぶ機会を得ている。学習会の参加者からは、「検査の流れを理解することで、患者への説明が自信をもってできるようになった」「遺伝の話題に触れることへの抵抗感が減った」といった声が多く聞かれた。

また、昨年度は地域医療従事者を対象とした講演会を開催し、「新潟県におけるがんゲノム医療の現状と課題」をテーマに、がんゲノム医療の基礎知識や臨床での支援実践を共有した。講演会を通じてゲノム医療の情報発信を行うことは、多職種を理解を促し、医療機関の連携を強化することで、患者がどこで診療を受けても適切な支援につながる体制づくりに寄与するものと考えられる。また、地域内での相談体制の拡充や適切なタイミングでの専門医紹介が進

むことで、患者にとって切れ目のない支援が実現することを期待したい。

5. まとめ

がんゲノム医療の拡大に伴い、看護師の役割はますます多様化している。検査前後の支援のみならず、患者と家族の価値観に寄り添った意思決定支援や倫理的配慮、多職種との協働が求められている。特に、検査結果に基づいて治療方針が大きく変わることの多いがんゲノム医療では、患者の不安や期待が入り混じり、情報の複雑さに圧倒されることも少なくない。そのような中で看護師は、患者の価値観を尊重しつつ、理解を助け、納得を伴う意思決定を支援する重要な存在である。

今後看護師が専門性を高め、継続的な支援体制を充実させることで、患者が自身の価値観に基づき納得して治療を選択できるよう、意思決定のプロセスを支えていく必要がある。

参考文献

- 1) 厚生労働省. がんゲノム医療推進体制整備事業について. <https://www.mhlw.go.jp/> [参照日2025-11-01]
- 2) 国立がん研究センターがん情報サービス. 遺伝性乳がん卵巣がん症候群 (HBOC). <https://ganjoho.jp/> [参照日2025-10-15]
- 3) 日本乳癌学会. 遺伝性乳癌卵巣癌診療ガイドライン 2023. 金原出版; 2022.
- 4) 日本看護協会. 遺伝看護専門看護師領域. <https://www.nurse.or.jp/> [参照日2025-11-01]
- 5) 井手宏, 他. がんゲノム医療における看護の役割. *がん看護*. 2023;28(3):150-158.
- 6) 大川恵. 遺伝性腫瘍患者への意思決定支援と看護介入. *日本遺伝看護学会誌*. 2021;5(1):12-20.
- 7) 平野かおり, 他. 遺伝医療に携わる看護師の教育と育成. *看護管理*. 2024;34(2):98-104.
- 8) 国立がん研究センターがん対策情報センター. がんゲノム医療ガイドライン (一般向け). 2020.